
今日寝て明日起きれば幻想入り

惰眠の極み

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日寝て明日起きれば幻想入り

【Nコード】

N0127S

【作者名】

惰眠の極み

【あらすじ】

いつものように寝て起きたら知らない天井で…的に幻想入りした少年。もういつも通りに退屈している暇はない少年。彼の明日はどこへ向かうのか？

くプロローグくもういくつ起きると幻想郷？（前書き）

初の小説投稿です。あまりシリアスはありません。台詞ばっかです。

くプロローグもういくつ起きると幻想郷？

「…知らない天井だ。」

というか、黒ベースで所々目がある天井ってどんなセンスだ？少なくとも病院じゃあ無いな…そう思い、起き上がろうとしたとき、

「…」「あら、やっと起きたのn…」「ゴッ

何かに関をおもいつきりぶつけた。

「ぐあああああ…！あ、頭が割れそうだ…！」

「…」「…」「…いきなり何するのよ…！」

「それはこつちの台詞だ！大体、ここはどこだ！？」

「…」「いきなり頭突きして何言ってるのよ！…まあいいわ。ここは言うなれば、『境界』ね」

「境界？なにそれこわい」

「…」「ふふ、別に怖くは無いわよ。とにかく、まずはここから出ましよう？」

「それには賛成だ。だが、ここから出られるのか？」

「…」「大丈夫よ、問題ないわ。この境界を創ったのは私なんだから」

そうか…自分で創ったものに閉じ込められちゃ世話ないもんな。

「…って、ええ！？」

「…」「何か問題でもあるのかしら？」

境界を創る、か……ん？なんだか知っているような気がしてきたぞ？

「そついや、あんたの名前は？」目の前にいる姿はよく知っているが、まさかとは思いつつ聞いてみる。

「…」「紫、私の名は八雲紫よ。それより、そろそろ出るわよ。」

「は？出るって、何、がっ…」

視界が白く染まって行くと同時に、俺の意識はブラックアウトした。今日寝て明日起きれば幻想入り…多分始まり。

くプロローグくもういくつ起きると幻想郷？（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございます。肝心の主人公の名前は次話に出てくる予定です。次は一週間以内に投稿を目標に頑張っていきます。

感想をくれたら喜びます。それでは。

↳ 第1話↳ 良い目覚めは物理的に？（前書き）

一週間以内って言うたのに…結構更新遅くなってしまいました。
今回は、改行を結構使ってみました。

それでは、かなりの駄文ですが、どうぞ。

〜第1話〜良い目覚めは物理的に？

「……きつ」

外から何か聞こえてくる。

「……起きて……」

これは…声？

「……なさい……」

誰の？

「……いい加減にっ」

いやそもそも俺は…？

???「起きなさーい!!!」

「ぬわーっ!?!」

声が大きくなつたと同時に、俺の下腹部に大きな衝撃が走つた。

「……………っつ!……………!!……………!!……………!!」

???「あら、ちょっとやり過ぎたかしら?」

???「ええ、かなりやり過ぎかと」

激痛に耐えながら、顔だけ声のした方向へと向ける。

「ぐっ…い、いきなり踵落としては無いんじゃない、か?」

気力を振り絞り、二人に抗議の眼差しと共に声を投げ掛けた。

「???」「愚問ね。散々声を掛けても起きない貴方が悪いのよ?」
「???」「声を掛けたのは私ですが。貴女は踵落としをしただけです」
「???」「そつ、そういう細かい事は別にいいのよ!」

「よかねーよ、つたく。寝込みと背中では撃つなって学校じゃ教わんないのか?八雲紫さん?」

紫「あら、私の名前、覚えてたのね。そこは評価してあげるわ。残念だけど学校には行ってないわ。それに、私は打っても撃つた覚えはないわよ?」
「???」「うまくありませんよ」

「同感だ。とりあえず、ここはど…こだ…?」
目眩と共に身体のバランスが崩れ、体勢が維持出来なくなった。

「???」「おつと。大丈夫か?今ここで倒られるとまた待たなくてはならないからな、いまは倒れくれるなよ?」
倒れかけた俺の身体をとっさに支えに、手を差しのべられ、それを掴む。

「ありがとう、まだふらつくが、大丈夫。倒れたりはしない!」
紫「あんなパンチ一発で倒れられても困るわよ。」

…平然とどや顔で肩をすくみ、鼻で笑い飛ばしながら、倒れかけた

原因がこちらに顔を向ける。

「……こっちみんな」

紫「随分なお言葉ね。一体、誰にここまで運んできてもらったのかしら？」

「こつなつた原因を作ったのはお前だろう、スキマ妖怪」

上から目線の物言いに、とりあえず反撃のカウンターをお見舞いする。

紫「ふーん。貴方も『スキマ妖怪』って呼ぶんだ…へえ…」

「さて、貴方『も』ってなんだよ!？」

予想外のカウンターに驚きを隠せず、声が裏返る。

????「実は、お前の前にも、3年前に此処に来た…いや、やって来た人間がいるんだ。」

「それは…俺と同じように外から…?」

紫「ええ、そうよ。彼も貴方と同じく、私の事を知っているようだったし、藍の事も知っていた。」藍「私達の他にも、幻想郷の事もいくつか知っているようだった。」

話を聞いていて、驚きつつ、一つの考えが頭の中で結論に導かれた。「やっぱり、此処は幻想郷だったんだな…」

紫「やっぱりって…他の考えがあったの？」

「ああ、てつきりコスプレの誘拐グループに拐われたかと。」

紫「コスプレ…？まあ、そんな事はどうでもいいわ。で？何処まで話したかしら？」

流石にコスプレは幻想入りしていないのか、二人ともよくわかっていないようだ。

「此処は何処だ？って所までだが…さっきの会話で大体わかつちまつたからな…此処は幻想郷の多分…紫の家。俺は紫の能力で幻想入りさせられた。というところか？」

これで大体あっていると思う。

紫「ええ、大体あっているわ。それじゃ、こちらから質問だけれど、貴方の名前は？」

「そっぴや言つてなかつたな。俺の名前は川瀬隼。かわせしゅん好きに呼んでくれ。」

俺が名前だけの簡単な自己紹介を終えると、怪訝顔になりながら、紫がこちらにもう一度顔を向ける。

紫「ところで隼、貴方、住む宛てあるかしら？」

何を言っているんだこの紫色は。

隼「あるわけ無いだろ！？こちらら、飛ばされてきたばかりだぞ！？」紫「まあ、そっぴね…。もし、良かったら住む所は紹介してあげるわよ？」

隼「まあ、それは有難いばかりだが…何処だ？妖怪の山のと真ん中、つてのは御免だぞ？」

紫「大丈夫よ。そういう意味では最も安全だね。：博麗神社、はどうかしら？」

：確かに、安全だろうな。経済面以外は。

隼「ああ、構わない。：というか、こつちが知っている前提で話をしているんだな」

紫「私はどちらでも構わないけど？私には関係ないでしょう？」

隼「まあ、そうなんだが：その神社、人を住ませる余裕があるのか？」

紫「その点は大丈夫。既に一人住んでるから。しかも、外来人がね」
怪しい笑みを浮かべながら、さらに不安要素を並べていく。

隼「そうなのか…。ところで、どうやって博麗神社までいくんだ？
徒歩か？」

紫「まさか。私なりのやり方でいくのよ。それじゃ藍、留守番頼んだわよ」

藍「朝食までには帰って来てくださいね。」

紫「それには間に合うようにするわ。さて、隼。行くわよ？」

嫌な予感しかしないが、確認はする。

隼「い、行ってくつて何処に!？」

紫「博麗神社に決まってるでしょ。」

隼「何でそんなに楽しそうなんだよ!？」

そう言いながら、俺は紫にスキマ送りに、いや、スキマに向かって投げられた。

隼「くそっ、2回目でも慣れないな、これは……」

スキマの中を移動？しながら、俺は一つ確信していた。

「これから当分、退屈してられないな……」

〈第1話〉良い目覚めは物理的に？（後書き）

最後は強引過ぎたかも……展開もかなりの急展開になってしまいました。

とりあえず、次は博麗神社に行く予定です。2週間以内にはもう1話出来たらいいなと思っています。それでは。

〜第2話〜落ち着くには茶を飲めればーちゃんが言った(前書き)

今回、かなり遅くなってしまいました。すみません。新学期の忙しさを舐めてました。1ヶ月以上も開けてこの中身のスカスカ感…我ながら酷すぎる。

「第2話」落ち着くには茶を飲めればーちゃんが言った

突然、壁が目の前に現れた。違う。これは…

隼「地面か？」

立ち上がりながら状況を整理していく。どうやら、壁がいきなり現れたわけではなく、地面に俺が落ちてきたらしい。

ふと辺りを見回すと、ここはどうやら神社の境内のご真ん中らしい。

紫「はい、博麗神社に到着」

上を見ると、スキマから紫が頭だけ出して微笑んでいた。

あのム力つくまでの笑顔は何処から来ているのだろうか。

隼「到着、じゃない。いきなり何すんだ！」

そんな罵声を気にかける様子もなく、勝手に話を進める。

紫「それじゃ、私朝ごはんがあるから帰るわね。貴方も頑張りなさいよ？じゃあね」

隼「ちょ、おい待て！」声かけも空しく、やはり無視してスキマに消えていく。

隼「…ったく。何も説明無しに帰りやがった。どうすりゃいいんだよ…」

とにかく、納得出来ない自分を置いて、境内を探索しようと、まだ痛む体で立ち上がり、顔を上げた目の前に、男がいた。

「???」おや、人間の参拝客とは珍しい。明日は嵐かな？」

どうやらその男はこの神社の関係者らしく、それっぽい格好をしていた。最も、神社の関係者の服装など、巫女服ぐらいしか知らない

準には、男の服装があくまでも『それっぽい』服装であるとしか言えないのだが。

準「あ、あんたは…？」

「…？」「ああ、失礼。名前を言っただけだね。僕の名前は太田雄二。ご覧の通り、人間だ」

準「いや、幻想郷で姿だけで人間だと言われてもな…」

雄二「本人が言っているんだから人間だよ。それより、君のその格好、どうやら…外来人らしいね。通りでこんな神社に来るわけだ」

雄二「そう名乗る男は、準の服装を見ると一人納得していた。それも、どこか懐かしそうな目で。」

雄二「いや、懐かしいな。2年前幻想入りして目が覚めたらここだったんだよな…ああ、あの頃は…」

準「（2年前に幻想入り…？紫が言っただのはこいつの事なのか？）

…なあ、聞きたい事があるんだが」雄二「ん？ああ、すまない。思い出に浸りすぎていたようだね。で、なんだい？聞きたい事って？」

準「ここって本当に…？」「ちよつと！雄二！あんた私の煎餅勝手に食べたわね！返しなさいよ！」…！？」

質問を言い切るより早く、怒号が境内に響き渡った。怒号と共に、神社から人影が現れた。

雄二「やあ霊夢。残念だけど煎餅を食べたのは僕じゃない。食べてない本人が言うのだから間違いないよ」霊夢「じゃあ、誰よ？…」

…まさか!？」

霊夢、と呼ばれた怒号の張本人は、怒りを押さえながら（押さえきれないもの）、雄二の話を聞き一つの結論に達した様だった。準「……………」

雄二「そう、そのまさかだ。丁度来たみたいだね」

霊夢「そう…やっぱりまた貴女だったのね、魔理沙!」

魔理沙「戸開けっ放しにして机に煎餅置きっぱなしにしているほうが悪い。あれじゃ『食べてください』って言っているようなもんだぜ」

魔理沙と言われた少女は悪ぶれる様子もなく、こちらに近づいてくる。

準「あれが、霊夢と魔理沙……………うん、博麗神社だな。ここは。間違いない」

準は一人納得するのであった。

雄二「……………魔理沙。口に胡麻が付いてるよ?ほら、これで拭くとい」

そう言っただけ顔で魔理沙にハンカチを投げ渡す。魔理沙「おお、すまない。……………ところで、そこにいる男は誰だ?見慣れない顔だぜ」

霊夢「男って……………雄二のことじゃ……………」

準「……………」

霊夢「誰よ、アンタ」

準「えっ」

雄二「霊夢、もしかして……………」

魔理沙「全然気付いてなかったのか!？」

霊夢はそこに突如現れた（彼女だけがそう思っているのだが）準に驚きを隠せない様だった。

準「あゝ、え〜とお、俺は川瀬準。好きに呼んでくれ。」

霊夢「そういう事を聞いているんじゃない？！」

雄二「霊夢。君が『誰だ』と言ったから彼は自己紹介をしたんだ。

何か問題でもあるのかな？」

霊夢「そんな屁理屈…！」二人の空気が怪しくなり、すぐにでも取っ組み合いになりそうな空気に変わる。その時。

魔理沙「取り敢えず、中に入ってお茶でも飲んで落ち着こうぜ！ほら、早く！」そう言い、二人を奥に引っ込める。

準「置いてかれた…何なんだよ一体…！」

魔理沙「お前も来い！そもそもお前が原因なんだぜ！」

準「あ、ああ。わかった。」

さも自分の家だと言わんばかりの魔理沙の態度に、押し黙るしか準には選択肢はなかった。

準「（お前が出てこなきゃまだ收拾ついていたと思うんだがな…）」と、言えるはずもなく仕方なく魔理沙に着いて行くのだった。

準「腹へった…まだ朝飯も食べて無いんだよな…！」

〜第2話〜落ち着くには茶を飲めればーちゃんが言った(後書き)

中身のスカスカ感に伴い、この微妙な超展開：ホントに我ながら酷すぎる。

今回、二人目のオリキャラを出しました。少し急ぎすぎたかも：博麗神社にはもうちょっとお邪魔させてもらおう予定です。

次はいつ出来るか少し解りません。テスト前に一度投稿できたらいいな(遠い目)。

〈第3話〉大胆にやれば大体ばれない（前書き）

こんにちは。また前話から1ヶ月たってしまいました。まあ、テスト前には出来たって事で及第点かな…？

いつもより会話多めですが、読んでくださると幸いです。

〈第3話〉大胆にやれば大体ばれない

ここは博麗神社。幻想と現実を隔てる博麗大結界の中枢を担う神社だ。この神社には、奉る神がない。そのため、参拝客はほとんど来ない。余程の物好きや暇人意外は。今、その人が来ない神社に訪問者がいた。勿論、その訪問者は暇人だった。

魔理沙「……で？お前は誰なんだ？どこから来た？外の人間なのか？何で朝から神社に落ちてたんだ？」

準「落ち着け。一つずつ答えるから一つずつ質問しろ。こっちも落ち着かない」魔理沙「むっ……」

準「……まあ、答えよう。え〜と、まずは……」

魔理沙「お前は誰なんだ？」

準「……とりあえず名前だな。さっきも言ったと思うが、俺の名前は川瀬準。ご覧の通りの男だ」

魔理沙「川瀬準……どっかで聞いたことあるような名前だな」

準「だからさつき言ったつたろ？」

魔理沙「覚えてないぜ」特に気にする素振りもなく答える。魔理沙は細かい事は気にするな。と言いながら、立ち上がった。

準「どこいくんだ？」

魔理沙「お茶を汲んで来るぜ。お前も飲むか？」

準「……え？あ、ああ、じゃ、頼む」

魔理沙「頼まれたぜ」

そう言い、奥の方へ消えていった。

準「…フリーダムだな…あ、そっか。そういうことか」
もともとお茶を飲みに来ていたことを忘れていた。

「ま、いいか…そう思っていたその時、魔理沙が抜けて行った方向とは逆から、音が聞こえてきた。」

準「なんだ？話し声…？」とにかく、声が出た部屋の襖を気付かない程度に開けて見る。その奥には…

準「霊夢と…確か雄二だったか？」

博麗霊夢と何かを話している太田雄二の姿があった。準「話、というより口喧嘩だな…」

霊夢「その屁理屈が駄目だって言ってるのよ！…あ、おいしい…」
ムシヤムシヤ

雄二「屁理屈のどこがいけないんだい？相手を納得させつつ降参させるいい方法じゃないか。…ん、このお茶はなかなか…」ゴクゴク

準「飲み食いしながら喧嘩だと…只者じゃないな…俺は何も見えない、見てない…」

呟きながら、襖を閉める。いや、閉めざるを得なかった。得体の知れない恐怖感が彼をそうさせた。

魔理沙「待たせたな！」

準「お…来たか…」

魔理沙「…？少しやつれたか？」

準「な、何でもない。問題ない」

何も見ていないからな、と言いながら首と手を左右に振る。

魔理沙「大丈夫そうだな、じゃあ、飲もうぜ」

準「ああ、そうだな」

言うのが早いか、その言葉と共にお茶を口に進める。準「ああ……うまい……」

魔理沙「それは何よりだ。そうだ、お前……」

ぐぎゅるるる……

魔理沙「……………」

準「……………」

魔理沙「…茶菓子も食うかって、聞くまでも無かったな」

余程恥ずかしいのか、顔を真っ赤にさせながら、

準「…す、すまん……」

そう言うのが精一杯だった。

魔理沙「遠慮は要らないぜ。なんたって霊夢の物だからな」

お前それでいいのか…そう思ったが、準には言わなかった。いや、気にしないことにした。

数分後。

魔理沙「…で、だ。お前はどこから来たんだ？」

準「外からだ。結構北の方だな」

魔理沙「やっぱり外からか。わかった。で、お前はこれからどうするんだ？」

準「これから、か…どうするかな…」

顎に手を当てながら、考えを巡らせていると、後ろの方から声が聞こえてきた。

雄二「とりあえず、紅魔館に行ってみないか？」

準「…！いきなり話しかけるな！」

振り向くと、霊夢と雄二の姿があった。

魔理沙「紅魔館か…いいんじゃないか？」

霊夢「あなたがどこに行こうが勝手だけどね…ちょっと魔理沙？」

魔理沙「何だ？」

霊夢「あんたまた勝手に私のお茶と茶菓子取ったでしょ？」

魔理沙「ああ。旨かったぜ。だがもう少し味は薄いほうがいいな」

霊夢「勝手に食べておいて何いってんのよ！」

また喧嘩か…飽きないな、と思いながら、雄二に行き先の確認をする。

準「それで？紅魔館に行くって？」

雄二「ああ。まあ、僕がそこに用があるというのもあるけどね」

準「用？何があるんだ？」雄二「来ればわかるさ」

魔理沙「おーい！終わったかー？行くのか？行かないのかー？」

霊夢「こら！話をそらすな！」

雄二「さて、どうする？」準「俺は…」

目をつぶり、思考を働かせる。

準「（紅魔館か、人間が行ってみ大丈夫か…？まあ、態度に気を付ければ問題ないか…いや…？魔理沙のあの口振り、あいつも来るのか？なら、あいつが来るのは、正門ではなく、おそらく、図書館…つまり…）」

準「（パチユリー&こあに会える…！）」

そして。

準「よし…!」

雄二「決まったかい？」

準「俺も行くぜ!」

魔理沙「なら話が早い。さあ、早く乗れ!」

準「え、筈？乗る?」

魔理沙「私もあそこに用があるんだよ。」

準「ああ…(思った通りだ)」

魔理沙「乗ったな？しっかり捕まれよ!とばすからな!」

準「いや、ちよつと…」

突如、浮遊感が襲う。

霊夢「ちよつと！私の話はまだ…!」

魔理沙「じゃあな、次までに柵に鍵でも付けてるんだな!」

雄二「行ったか。じゃ僕も…」

霊夢「ちよつと…!？あんたも………行っちゃった…。何なのよ、もう」

?「あややや。随分とお疲れのようですが、どうなされましたか？」

霊夢「あんたのせいでもつと疲れそうだわ」

?「中々酷い事を言いますね。でも安心してください。霊夢さんには用はありませんから」

霊夢「…は?」

?「いえ、とある方からの情報でしてね。なんでも、外来人が博麗神社に来ているとか」

霊夢「ああ、それなら…さっき紅魔館へ行ったわよ。」

?「あややや、すれ違いでしたか」

霊夢「残念だったわね」

?「むう……この際霊夢さんでもいいです!」

霊夢「この際って何よ」

?「さて、今度こそ教えて貰いますよ!」

霊夢「な、何よ……?」

?「霊夢さんのスリーサ……」ドゴオ

霊夢「……ぶつわよ?」

?「もつぶってますが」

霊夢「…………」ガツシボツカ

?「おお、いたいいたい」

霊夢「……足りない?」

〈第3話〉大胆にやれば大体ばれない（後書き）

いつもより長めでした。まとめが利かないだけかもしれませんが…
次は文化祭前を目標に頑張りたいです。それではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0127s/>

今日寝て明日起きれば幻想入り

2011年10月8日22時43分発行